

入選

「今日もがんばれ」からもらう元気

香川県 白方小学校 六年
眞鍋 颯太

ぼくはこの作文を書こうと思ったときに、パツと思いうかんだ人がいる。それはいつもニコニコ笑顔の“田中のおばちゃん”。ぼくの学校で、田中のおばちゃんを知らない人はいない。

田中のおばちゃんは毎朝、白方小学校の子どもたちの通学をボランティアで見守ってくれているスーパー見守りおばちゃんだ。晴れの日、雨の日、くもりの日、風の強い日、暑い日、寒い日、どんな日でも休まず、ぼくたちの通学を見守ってくれている。

小学校に向かう坂道を下ったところにある、公民館の交差点がおばちゃんの定位置だ。学校までもう少しのところに、いつも立ってくれている。

「おはよう。今日もがんばって歩いてきたなあ。今日もがんばりなよ。」

田中のおばちゃんの前を通るほんの少しの間に、声をかけてくれる。ぼくも、

「おはようございます。いってきます。」と言って、足を進める。

実は、ぼくには学校に行きたくない日がある。それは、テストの日、好きな授業がない日。それでもランドセルを背負って玄関を出て、トボトボ歩いて学校へ向かう。

公民館の交差点に差しかけたとき、田中のおばちゃんがぼくの気持ちに気づいた。

「おはよう。大丈夫？元気？元気出しなよ。」と、元気がないぼくの表情を見逃さない。ぼくは、
「あっ、気づかれた。」

と心の中で思いながらも、気づいて声をかけてくれたことがうれしくなり、少し足取りも軽くなって、学校に行くことができる。もし、田中のおばちゃんがいなかったら、ぼくは足取りが重いまま、しんどい坂道を登っていかなければならなかったと思う。

田中のおばちゃんの前を通り過ぎる、ほんの少しの時間。その数秒で、不思議なパワーを持つ言葉がくり出される。毎日、見守ってくれるだけでもすごいのに、ぼくを元気な気持ちへ変えてくれるのもすごい。

そんな田中のおばちゃんが、年れいを理由に見守りボランティアを引退すると言い、何日か来ない日があった。理由がわからなかったぼくは、なぜいないのか、体調が悪いのか、など心配した。母から理由を聞いたとき、ぼくはまだ見守ってほしいと思った。

そう思ったのはぼくだけではなく、他の友達も同じだった。友達も、田中のおばちゃんがいらない交差点にさみしさを感じていた。そのことを母に伝えると、田中のおばちゃんにこのことが伝わるのは早く、

「そんなうれしいこと言ってくれるなら、もう少しがんばりましょうか。」

田中のおばちゃんが戻って来た交差点には、毎朝笑顔がある。安全を守りながら、パワーのある言葉でぼくたちを学校へ送ってくれる。ぼくは、そんな田中のおばちゃんに、ずっと元気にこの場所で見守ってほしいと思っている。

いつもありがとう。田中のおばちゃん。